



学校便り 琢磨

令和4年度 第5号 R4.5.18 三豊市立詫間小学校

栄光を讃える！

5月8日（日）に、観音寺総合運動公園陸上競技場で行われた第54回近県陸上競技カーニバル大会の入賞者を紹介いたします。敬称は略します。おめでとうございます。

【5年女子100m走】

第2位 橋本 怜 記録16秒42

第8位 西原 詩 記録16秒96

【5年男子100m走】

第8位 林 遥斗 記録16秒00

【6年男子100m走】

第7位 渡辺 恵二 記録14秒51

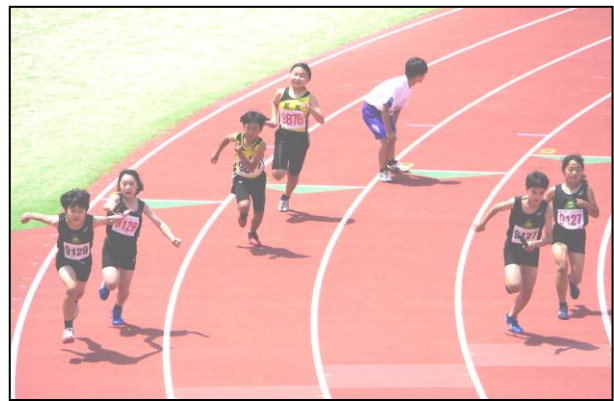
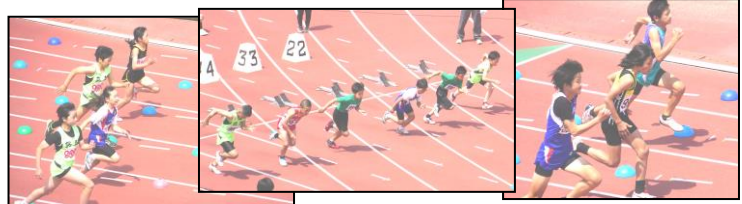
【5年男女混合4×100mリレー】

第1位 詫間小Aチーム 林 遥斗、妹脊 尽、西原 詩、橋本 怜 記録62秒63

第8位 詫間小Cチーム 大西 那央、犬伏 玲煌、高瀬 悠真、田尾 美結 記録65秒52

【6年男女混合4×100mリレー】

第6位 詫間小Aチーム 松田 歩実、渡辺 恵二、林本 紗空、定岡 凡悟 記録59秒65



学生ボランティアの先生が来ます

5月11日（水）から本年度末の3月末まで、毎週水曜日の午前中（7:30～11:00）、学生ボランティアの「工藤 琴音（くどう ことね）先生」が、本校に来てくれます。朝は、通学バスの受け入れ、朝の会から3時間目までは、各学級（1年松組→6年梅組）に順番に入ります。工藤先生は、詫間小学校の卒業生で、現在は高松市の大学に通っています。将来は、教師になることを目指しているそうです。

どうぞ、よろしくお願ひします。



6月の主な行事予定

6月5日（日）日曜参観（9:20～10:05…1,3,5年 10:20～11:05…2,4,6年）参観のみ実施

6月6日（月）振替休業日

※ 1学期に行われる資源回収への、小学生、教職員の参加は見合わせます。

※ 5年生の屋島での集団宿泊学習は、今年度も1学期末のデイキャンプ（2日間）に変更します。

※ プール開きは、6月の2～3週目に行います。決定次第、お知らせします。

とにかくこわかった祖父

おじいさんやおばあさんというと、「優しい」というイメージをもっている人が多いのではないのでしょうか？私は、「祖父は、こわい人。」という印象が強いのです。それしかないのです。私の母方の祖父は、近所で瓦屋を営んでいました。私は、幼い頃からその工場を遊び場代わりにしていました。仕事中の祖父は、とにかくこわかったのです。なんでいつもあんなに怒っているのだらうと思うくらい職人さんや祖母に対して怒鳴り続けていました。職人さんの一人に「たくまさん」と呼ばれていた背中が丸くなったおじさんがいました。仕事の合間に、私に粘土を持ってきてくれたり、昼休みに遊んでくれたりしました。その「たくまさん」にも、祖父は、ずっと怒鳴り続けていたのです。明治生まれの職人（親方）ですので、その頃は、それが当たり前だったのかも知れませんが、私も幼かったので、「ずっと怒鳴り続けて」と思い込んでいただけなのかも知れませんが・・・。

「こらっ！あれだけ言うとなつたやろが！何考えとんじゃ。」なんてのは当たり前。「お前、何十年経ったらまともに仕事ができるんじゃ！一生半人前じゃの！」という言葉と共に、セメントに向かって叩きつけられる瓦の割れる音が、恐怖心を倍増したのかも知れませんが、私から見ると、きれいに焼き上がった瓦を、とにかく、憎しみを込めたように片っ端から叩き割っていくのです。その破片が、私の足下にも転がってきました。祖父が、他の場所に行くと、「たくまさん」は、竹ぼうきで破片を集めていきます。そして、また、黙々と作業を始めるのです。

今考えると、祖父は仕事に厳しかっただけだと思うのです。「一生に一度の新築の家の屋根になる高価な瓦や、いいかげんな物は出せん。」と、瓦屋を廃業する直前、一度か二度、つぶやいた祖父の言葉通りに仕事をしていた、祖父は真真正直な頑固者だけだったのでしょう。

そんな祖父ですので「おじいちゃん！」と、自分から甘えていったことは一度もありませんでした。

ところで、祖父の瓦工場の真向かいに「ちおや」という「うどん屋」がありました。そこには、うどんだけではなく、おでんやアイスクリーム、大判焼き、ちょっとした駄菓子もありました。もちろんお酒も出していました。私は、100円札を持って、うどんと大判焼きを買いに「ちおや」へ行ったものでした。すると、時々ですが、店の奥の方にお酒を飲んで酔っ払っている祖父を見ることがありました。いつもは無口でしかめっ面ばかりの祖父も、その時ばかりは、「おう、うどん買いに来たんか。おかみ、わしの孫に大判焼き2つ持たせてくれ！」「うどんができるまでこっち来てすわれや、ジュース飲むか？」と、とても愛想が良かったのです。私は、喉から手が出るほどジュースが飲みたかったのですが、祖父とその周りいる酒とたばこのにおいのするおじさんたちの顔や声が怖くて、首を横に振って、じっとしていたものです。うどんは、その店で食べたことは一度もありませんでした。「おかもち」という木の箱にうどんを入れて、紙袋に入れてくれた大判焼きを2つ手に持って、逃げるように店を出たものでした。祖父は、しつこくは言いませんでした。「うちの孫は、おとなしいきん、うどんは、家に持って帰って食べるんや。」と、お酒を飲んでいる友人に話すくらいでした。

満州で終戦を迎えて、その後はとても苦労して命からがら日本に戻ることができた祖父、みんなを怒鳴りつけるばかりの祖父も、私が就職する前に亡くなってしまいました。亡くなる直前まで、髪はふさふさで、毎日、牛肉を1kgも食べていたそうです。

ただ、一つだけはっきりと言えること。それは、祖父は、私に対しては、怒鳴りつけたり叩いたりしたことは一度もなかったということです。粘土を練る機械の中に、私がいたずらをして釘を入れてしまった時でさえ「ええか、この機械に釘を入れたら、瓦の中に釘が入ったまま焼くことになるやろ。そしたら瓦は割れるやろ。割れたらそこから雨漏りがする。お前は、そんな家に住みたいか？」と諭すように叱られたのです。きっと、明治生まれの頑固職人も、孫だけには甘かったのでしょうね。

それでも、私は祖父の印象と言えば「こわい人」しか残っていないのです。不思議に今、思い出す祖父の顔は、お酒を飲んで赤くなった、しわだらけの笑顔だけなのですが・・・。